



TITLE:

倫理と経済との関係(一) (特別號)

AUTHOR(S):

財部, 靜治

---

CITATION:

財部, 靜治. 倫理と経済との関係(一) (特別號). 經濟論叢 1925, 20(1): 273-294

ISSUE DATE:

1925-02-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128233>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會

# 經濟論叢

第 一 號      第 二 十 卷

大正十四年一月一日發行

特 別 號

地租と營業稅との <small>對立に關する</small> 考察……………	法學博士	神戸 正雄
西陣の機業仲間……………	經濟學博士	本庄榮治郎
朝鮮の農業金融組織……………	法學博士	河田 嗣郎
<small>往古に於ける</small> 上海と日本の史的關係……………	文學博士	新村 出
資本の社會的性質……………	法學博士	河 上 肇
ビオ・ソシャル假説の意義……………	文學博士	米田庄太郎
産業集中 <small>ての</small> マルクス説の謬想……………	法學博士	田 島 錦治
金紙幣本位制……………	法學士	作田 莊一
水産資本融通問題……………	法學博士	山本美越乃
海運 <small>に於ける</small> 競争の運賃に <small>及ぼす</small> 影響……………	法學士	小島昌太郎
支那の帝政と支那の文化……………	文學博士	矢野 仁一
倫理と經濟との關係……………	法學博士	財部 靜治

# 倫理と經濟との關係 (二)

財部 靜治

## 目次

- 一、序言
- 二、倫理と經濟との交渉及その特異
- 三、倫理と經濟との關係に關する學說變遷の一斑
- 四、社會改良論に於ける道德的要素
  - (イ) 社會改良の現努力に於ける一特色
  - (ロ) 前世組に於ける英蘭經濟學の道德化——此變化とM<sup>1</sup>の功
  - (ハ) 經濟發達の三組に關するE<sup>1</sup>の所説
  - (ニ) 諸社會改良論者の影響
  - (ホ) 實證學派の社會改良
  - (ヘ) 道德的時弊の承認
  - (ト) 結言

## 一

「草木<sup>クサキ</sup>の發生して止まざるが如く、つねに我が心の内に、天機の生きてやはらぎ喜べる勢の止ま

ざるものあり、是を名づけて樂オシシと云ふ「學ばざれば此樂を知らず」俗人は「私慾にわづらはされて此樂をうしなふ」と訓へし貝原益軒の所説は、之を現時の如く經濟自由制度の下、平民一般に生計に逐はれ、春花秋月の四季循環、自然變化に、娛樂を求むるの餘裕漸次失はれ行く時代に説く場合、果して平民の間に、幾何の羈束力を有し得べきや、疑なき能はずと議しおきつゝ、されど又之と反對に、現時經濟上に於ける萬人につき、その經濟行爲に出づるの動機を觀し、恰も古人がその當時の商人心理を觀したるが如く、一に私利を射て東又西すと説くは、眼玉餘りに小き貪慾哲學家といふべきに非ずやとは、六年前の年末に近づきて、一雜誌に寄せし「協力論」の緒言中に、挿みたる論旨たり、當時恰も經濟と道德との關係如何、倫理學と經濟學との關係如何の問題が、論者の腦裡に迷執されつゝありしは、同論文中に自白せるが如し、爾後も此問題に興味を有することは、依然として渝らざりしに拘はらず、別にその研究を深刻に進むるの機會を得ざりき、今本誌新年特別號發刊の舉あるに當り、新らしき論題を捉へて靜思するの餘暇を得ず、倉皇右の記憶を辿り、筐底の舊稿に申譯けの添竄を施し、寄稿の責を塞ぐこととせり、疎忽の譏りは素より甘んじて之を受くと雖も、他日復た之を緣由として、精研に就くの機會に接せんと欲す。

## 二

倫理學は一般道德論として、吾人間に於ける道德生活の格言たり、又かゝる生活判斷の規矩た

り得べき、諸原則を確認す、道德生活としては人々の生活中、他人に對し社會に對する諸義務を、盡すべき程度に於て之を問ふ、是等の義務は家族、地方自治體、及公民社會の一組成員としての、各個人の義務たり、又一般福祉のために人々により組成されたる、諸團體の義務たるを共に、職業及營利活動に於ける、各個人の義務たり、その中には自から雇主の勞働者に對する處爲、勞働者の雇主に對する處爲、購買販賣、商品引渡、土地家屋の貸借、仕事給付の義務、信用取引等に於ける、各個人の處爲も含まるゝや謂ふ迄もなし、從ひて又倫理學は社會諸學の一科、即ち社會倫理として、道德律の見地より、人間共同體の諸社會狀態に對し、又その共同體內に於ける人々の諸行爲に對し、諸要求を發すべし、即ち倫理學は個人及國民が、その道德生活の目的を果すために、達せんと努むべく、又その義務を盡すことにより、之に近づかんことを、理想的道德目的を示す。而して右道德的社會狀態の確立、右理想的目的への接近は、國民經濟の諸狀態及經濟上に於ける人々の處爲と、一番に關係あり、從ひて又倫理學は國民生活に於ける此範圍と、その範圍内に於ける人の諸行爲及諸施設とにつき、諸原則諸規矩を設定すべし。<sup>\*</sup>實に現時にありては倫理と經濟生活との間に、矛盾あるべきに非ること、倫理は各個人につき眞に開化されたる生活を求め、各人はその正當なる欲望一切を允たし、又その諸能力を最も完全に暢達せしむるの、機會を收むるに足るだけの、物質を供給せらるべきことを求む、同様に又貨物の生産分配

\* Cf. Schönberg, Volkswirtschaftslehre, I. 4. Aufl. '96 S. 63.

が、生産者の人格完成に寄與すると同時に、社會一般の改良發達にも、寄與するが如く營まるべきことを求む、有名なる佛蘭西の一哲學者 François Huet 言へるが如く、倫理學は元來道德的完成及道德的價値の學問たるや、經濟學が元來物質的安樂及價値の學問たるや、その趣を同じうす、事實上倫理學は、隣人及社會に對し、引いて又吾人自身に對する關係上、吾人が盡すべき諸義務諸本分を決定し、而して經濟生活の諸行動全部も、かゝる義務觀念により律せらるゝの要ありとなす。<sup>\*</sup>

素より倫理と經濟とは、その事相に於て特色を異にすべきは謂ふ迄もなし、即ち道德行爲及經濟行爲が、共に分別ある一行動たるも、それは個別の人の活動によりて實現さるゝのみならず、共同體の活動によりても亦實現さるゝことを、確認する程度迄は、倫理と經濟と共通の途を辿ると雖も、その以外に於て二種行動は物體により分たる、倫理的共同體は人々そのものに關し、而もその精神的性質より、流れ出づる意志の方向、從ひてその性格に關するも、經濟的共同體は之に反し、元來外物が右意志の方向に合致する限度内に於て、その外物に關係す、兩者は行爲を判斷するも、異なる出發點より然りとす、即ち行爲は倫理的には、その行爲の土臺となれる、意圖に鑑みて評價せられ、經濟的にはその行爲に歸せらるゝ、影響に鑑みて評價せらるゝ、生存の共同體全般は倫理的なるも、經濟的たるは外界貨物に向けられたる、共同體の表明に限らるゝ、從ひて各

\* Cf. Ely, An Introduction to Political Economy, New ed. 'or pp. 77, 78.; Laveleye, Eléments d' économie poitique, 9. ed. '14 p. 8.

共同體は倫理的影響を有するも、經濟的影響は必然各共同體に伴ふべきことなし、(假令は宗教共同體につきて然り) 従ひて倫理は寧ろ多くは消極的たり、個別の人が共同體內に合體される、自己の利益を害することなくして、自由に行動し得べき範圍を劃すべき境界を示すも、經濟學は寧ろ多くは積極的に、一政略に志し、共同體の利益上特定行爲を、達成せしめんとするの事情を生ず、假令ば特定の倫理織込まるべき、一宗教の掟にありては、通常命令よりも寧ろ禁止を含む、諸格言中に宿されたる倫理は、自から堪ゆることを欲せざる惡事を、他人に加ふべからざることを勸む、Schopenhauerにより、何人をも害する莫れ、寧ろ出来るだけ凡ての人を歡ばせよとの趣旨の下、説かれたる倫理の最高原則、Neminem laede; imo, omnes, quantum potes, iuva も亦否定を先立たしめ、積極的給付は條件的にのみ附言せらる。<sup>\*</sup>

### 三

前述の如く經濟も亦倫理により、支配さるゝと考ふる點に於ては、その他幾多の點に於けるが如く、古くして一層深遠なる觀念への復歸ありき、即ち吾人は此點につき、あらゆる經濟的研究を、倫理的考量に従屬せしめたる希臘人、特に Plato 及 Aristotle に遡れり、彼等は決して「如何にして國を富ましめ得べきか」<sup>1)</sup>と、いふことを問ひしことなく、寧ろ「一國民の諸經濟的施設、諸仕組の秩序を如何に立てなば、全公民の最高福祉が、最もよく振興さるべきか」を問へり彼等が經濟界に求めし所は、人の身的智能的及道德的最高啓發のための、一基礎に外ならざり

\* Cf. Gruntzel, Theorie der Volkswirtschaft. '23 SS. 195, 196.

き、かくて彼等は富の蓄積を、決して一の目的それ自體とすることなかりき、素より Xenophon 特に又富の生産よりも、その使用に注意を注ぎたる Aristotle は、經濟學理を以て、國家又は個人がその享樂の追隨及富の使用上、則るの要ある諸規則の研究視したり、近時經濟學者中最も博學なりし、Roscher は言明せり、「古代學者により富の使用につき、説き出されたる諸規則は、凡ての事柄につきての神隨たり、經濟學と道德とを結びつべき關係は、是等の格言中に確證せらる」と、彼等の眼中に宿せる經濟事實は、かく制限せられしも、その考へ方の一般傾向は、社會經濟及政治の諸題目に關する、一切の大學者に普通なりきと謂ふも過言ならず。<sup>\*</sup>中古の歐洲にありても教會は、社會生活の諸範圍一切を、倫理の諸要求に従たらしめんとし、又一時の間多少の成功を收めたり、人身的奉仕、借財の返済、物價につき、規律せらるゝ所ありき、公平代價 [justum pretium] てふ概念は編まれ、有力なる一影響を及ぼせり。<sup>\*\*</sup>然るに前世紀不信心時代に至り、革命的唯物主義の波濤は世界を一掃し、爾來倫理と經濟とを離反せしむるに努め、實際界にありては倫理を經濟の下に立たしむるに至れり、社會生活の高尙なる諸範圍は、一層劣等なるものゝ助けたらんこと要求せられ、議會及立法上社會の諸問題を論ずるや、その胸中に宿せる大眼目が、最大の可能殖産に存せるを示し、その見解上人道的考量も、生産増進の考量に當面しては、之を曲ぐるの要ありとするが如き仕方を以てし、甚だしきは人道論を、感傷的論旨として嘲罵するが如き實例も珍しからざりき、米國にありては小學校のために、經費を得んとするが如き

\* Cf. Ely, op. cit., p. 77; Laveleye, pp. 9, 10.

\*\* Cf. Ely, op. cit., p. 118.



際にても、民衆の智能啓發が、脩身の目的上行はるべきの主旨は忘却せられ、之がために一に社會の生産力を増し、又は富の掠奪を防ぐの效あるべきを、立證するの要あること珍しからざりきとせらる、高雅なる藝術、音樂の如き、最も鄙俗なる物質的考量と、大に遠ざかるべきものは、何れも政府の振興策には、不似合の範圍と思はるゝこと多し、特に物質開化偏重の餘弊として、高尚なる理智は開發されず、性格を着實ならしむるなく、義務觀念と高き威力に悅服するの信念とは養成されず、野鄙放逸なる享樂欲に耽溺せしめ、ために又人をして薄志弱行たらしむべし、中にも經濟上の強者にして、同時に傍若無人なる人々が、自由を濫用せるは、輓近社會に面倒をかくるの、實入り多き一原因たりき、此種の階級民は頗る夥しく起れり、蓋し諸種の經濟的技術的變化、特に景氣の劇變は、突然に貧者を富まし、又鑛物藏匿地、都市勃興地に於ける土地所有者の例に於けるが如く、屢々單純なる偶然により、之を富ましめたればなり、然るにかく物質上の勢力を、新たに又突然獲得することに伴ふ、諸誘惑に對し、その欲を制するは、普通の人情にとりては、一大苦悶なり、品性野鄙なる者は、之に耐ゆるを得ず、成上り者 *parvenus*, *upstart* 及佛人か新大盡 *nouveaux riches* と呼べる人々は、下卑たる唯物的奢侈の、風教壞亂的先例を開き、品性野鄙なる人々は、資力の餘裕あるに任せ、之に倣ひて贅澤す、かくて華奢を競ふの風起り、引いて又投機、詐欺、委託金費消、姦通、避妊、離婚、自殺等の、背德現象は頻々として起る、而

して最も不仁なる雇主として、社會的紛議を重大ならしめし者も、虞らくはかゝる成上り者の中に發見さるべし。<sup>\*</sup> かゝる時運に際會して、經濟學と倫理學と關係あることは、屢々拒まれたり、否俗人間にありても。亦兩者の間實際の衝突ありとするの觀念行はるゝや、「大倉鶴彦翁」と題せる本には、「石ころ入りの罐詰」を景品とするやとの、一讀者よりの間に對し、「當節そんな正直な了見では、金持になれぬ」との、一記者の觀想明かに之を證して餘りあり(大阪毎日新聞一四、九二三號參照)外觀上かゝる衝突ありとするの觀念は、尠くとも A. Smith に遡りて、之を伺ひ得べし、蓋し氏は經濟學の福音視せらるゝ「諸國民の富」を以て、道念をも取扱ふべき一大系統論の、一部に外ならずとせるも、その經濟學系統論の基礎は、之を利己の原則におき、倫理の系統論を、同情の原則の上に立てたればなり、かくて人間行動の二主要動機は、財布及良心として對立するものとせられ、前者は經濟人により代表せられ、后者は道德家により代表せらるゝ、而してその兩者間には調和の望なき衝突あり、經濟學と倫理學とは、互に何等の關係を有せずとの、見解は起れり。<sup>\*\*</sup> 實に經濟學研究上抽象的個人主義的傾向を奉じ、經濟界と道德界とを嚴重に分ち、經濟界にありては私慾主義のみ決定的動機たるべしと觀し、物界をその物質的方面によりてのみ考察し、(從ひて人間が資源の使用上、決心すべき諸目的、換言すれば經濟問題に伴ふ心的道德的方面は、之を不問に付す) 出來る丈け無制限なる私慾的努力により、個人的利益を計らんとするがために、惹起さるべき國民經濟狀

\* Cf. Ely, op. cit., pp. 77, 50.

\*\* Cf. Seligman, Principles of Economics, 3. ed. '08 pp. 32, 33.

態を、その尋常又最良なる状態として演繹せる間は、經濟學に一の倫理的學問たる性質は備はらざりき、その當時斯學の敎理と、倫理學の敎理との間、直接衝突ありき。<sup>\*</sup>

されど現時の見解は之とその趣を異にす、現今倫理學は法學政治學と等しく、その基づく所元來社會的なり、一切の個人倫理は社會倫理の所産派生なりとせらる、善惡の眞概念は元來一の社會的概念として起り、后に個人に移されたり、人は社會内に住むを以て、公益を増すべしと認められしものは、何事にても道德の準繩と思はるゝに至れり、蓋し公益に資せず、又は之に悖ることをなさんと固執する個人は、結局社會を滅落に終らしむべく、從ひて社會の一員たるべき、個人自身の滅落をも招くべし、故に不知不識道德の準繩たるに至るべきもの、假りに效用に存すせば、そは個人的效用に非ずして、社會的效用にあり、正直は最良の政略なりと言ふ場合、正直なることにより常に特定の人に、益ありとすることを意味せず、蓋し吾人は不幸にして之に反する事例を知ればなり、吾人の意味する所は、正直を以て社會のために最良の政略なりとするにあり、從ひて個人のために一樣に正當とせらるゝに至れり、幾年代もこの經驗を重ねるに從ひ、右の結論及之と同様な結論を、人の一本能化せしめ、かくて又道德訓としての、<sup>キヤデゴリカルイムベンチヤ</sup>至上命令の存在を確認するに至れり、人の全倫理的發展は、その行動を理想的社會福祉に合致せしむるにあり。<sup>\*</sup>素より倫理學は從來人を、孤立の一個人として考ふることに、餘りに専らなりしことある

\* Cf. Schönberg, op. cit., S. 65.

も、現在及將來に於ける之が進歩は、明かに諸社會關係の吟味に存す、實に倫理學は之を社會諸學の一つとするに非る限り、一の實際的存在を有し得べきや、疑問となし得べし、而して經濟學は倫理學か、經濟生活發展の一指針として、授くべきものを受け入る、唯倫理的諸概念が一切の社會生活を支配すべき程度は、時及處により厚薄なきを得ず、古來東洋諸國民の經濟生活が、倫理的諸原則の支配下にありしは、輒近西洋諸國民の經濟生活につきて、見るよりも一層濃厚なりき、東洋の倫理的諸原則は、その性質上或は西洋倫理の現標準の如く、高められたりとするを得ずとするも、一旦かゝる原則として立てられたるものが、民衆の生活に浸み亘れるが如きは、現在<sup>\*\*\*</sup>の西洋に見ざる所たり。

倫理學と國民經濟との一新關係を以て、輒近國民經濟の特色ある一特徴とすべきは、前世紀中經濟狀態の態様に、重大の影響を及ぼし、現に又及ぼしつゝあるも、従前にありては全く存せず、存するも進める程度に於て然りとすべきことなかりし、二現象起れるによるものなり、その一は倫理と國民經濟との間、何等の矛盾存すべきに非ず、道德律は國民經濟をも律すべく、經濟上に於ても履行さるべし、國民經濟は社會生活國民生活の道德的一現象たるべしとするの見解、勝利を占むるに至れることなり、その二は諸開化國民が、國家生活、學問及社會上に於て、道德律に則りて行動せんと、熱心に努力することなり、時代の一符牒とすべきもの、幾分か茲にあ

\* Cf. Seligman, op.cit., p. 33.

\*\* Cf. Ely, op. cit., p. 118.

り、素より従前の國民經濟上、道德論の諸要求を充たすことを、全く努めざりきと説かるべきに非ず、唯倫理と國民經濟との間に、何等の矛盾存すべきに非ること、一般に原則的に承認せらるることなかりき、又國民經濟に於ける道德的要素承認せられず、又は充分に尊重せらるることなかりき、而して此元素を實現せしむるに努むることを以て、一般經濟政策及特別社會政策を、決定すべき一原則とすることなかりき、かくて國民經濟に於ける道德的要素を認識せること、之を實際に實現せしめ、道德論と實際經濟狀態との衝突を、排除せんと劣むることは、恰も前世紀に於ける大改良及現在改良運動の、本源的一因子たり、かくて之を以て特色ある一特徴視するの要あり、之を不問に付せんか、軌近國民經濟の今日に至る迄の發達をも、現時の大社會運動をも、正當に了解し得ざらん。<sup>\*</sup>尤も實地政策上にありては、個人に對する必要干涉が、道德上物質上の兩面に照し、全體としての國のために何が良策たるか、深く考へたる上にて決行されず、氣紛れ又專擅的に行はるゝの觀あるがために、惜むに餘りあることあり、吾人は我邦政治の實際に暗きを以て、立入りたる評論は之を憚るものなりと雖も、直接社會政策を執掌すべき、我邦官廳局課の改廢伸縮、近年頗る頻繁に行はるゝ見、右の如き時弊全くなしとするを得べきか、疑なき能はず。

右の如く倫理は計畫されたる諸社會改良に、手綱を授くべしと觀することにつきては、現實派

\* Cf. Shönberg, op. cit., SS. 63, 64.

\*\* Cf. Cunningham, The Progress of Capitalism in England, '16 p. 119.

經濟學者を以て自認せる、學者によりても反對あることも注意するの値あり、即ち Grunzel は惟へらく「倫理と經濟との間に、矛盾存在すべきに非るや確かなり、されど經濟行爲につきても、倫理的に動機づけらるゝと考ふべきものとせんか、固有なる一學問の必要は、全く失はるべし、風俗及法律は經濟活動の開化的條件なり、その經濟行爲がその範圍内を自由角逐場裡とすべく、從ひて道德上無關心たり得べき、全境域に外ならず、一經濟現象は最初には經濟的價值判斷を、下すの機會を與へ、又多くはかゝる機會を與ふることだけに限らるべし、倫理的價值判斷を下すの機會を生すべきは、風教の侵犯を見るべき場合に始めて然り、從ひて倫理は經濟行爲の大部分につき問はるゝことなし、殘餘の行爲につき問はるゝとするも、消極的に然るのみ、即ち倫理が經濟行爲に、最上の限界を下すことによりて然り、從ひて經濟政策上積極的目的を立つるがためには、全く不用なり、唯倫理に於ても經濟學に於ても、人間活動の目的として立てらるべき、公共福祉又は國民の福祉を説くことにより、混和惹起さるゝは確かなり、されどそれは共同體が倫理的にも經濟的にも、意義を有することを語る以外に何事をも語らず、之につき兩者の職分は異れり、蓋し人の行動は倫理的には、人生表明の全實現を包括し、かくて共同體と之に結合さるゝ個別の人との、關係に關するも、その行動は經濟的には、欲望充足のための計にあり、かくて共同體と外界物體との關係に關す、從ひて經濟政策はその政柄をそれ自體のみに求むべく、之を倫理

に求むべきに非ず」\*と、されど倫理は消極的なりとせる氏の主張には、幾分か偏狹の嫌あるが如くなるのみならず、吾人は一切の經濟問題に物的事相と、心的道德的事相を伴ふと觀し、經濟學の獨立を害せずして、倫理的評價を採入れ得べしと考ふるを以て、今その説を採らず。

次に尙注意すべきは、道德的價值判斷が人によりその歸結を異にすることあるべきことを、斟酌するの餘地あることなり、此點に付 Conrad の新版經濟政策論中、説く所あるを以て、以下紹介すること、せんか、曰く\*\*

社會政策問題の處理に當り、その道德的價值判斷上、認識の諸結果により要求され得べきが如き、必然的一般通用力を備へざることを、考ふべきは素よりなり、認識は外面的知覺、經驗の諸物體より發程するも、道德的判斷は終局に於ては理想に基づき、立證すべからず駁撃すべからざる、世界觀の諸元素を土臺とす、この道德的價值判斷が、一般に承認さるゝの外なかるべきことは、立證され得べきに非ず、寧ろその判斷が事實上、如何なる範圍迄承認せらるゝか、又そは一般通用力を具有せざるも、實際は一般に通用することを、叙説し得るに過ぎず、道德的判斷は必然主觀を離れざるに拘はらず、社會的考察はかゝる判斷を斷念するを得ず、されどかゝる價值判斷と、研究に含まるゝ認識の結果との差別を、自から意識し、かくてその價值判斷を、外面的經驗に基づく考察の結果より出来る丈け引分け、又その

\* Cf. Gruntzel, op. cit., SS. 196, 197.

\*\* Cf. Conrad, Volkswirtschaftspolitik, 10. Aufl. '23 SS. 4, 5.

判斷を生むべき最終の土臺を尋ね、その世界觀の相違につれ、意見の相違あることを、明かにせんことを期すべし

と(此論旨に關聯して、拙稿「進歩か退歩か」特に本誌十三卷六八頁參照)素より道德的判斷が客觀的に立定せらるるの望、全くなしとすべきや否やにつきては、自から議論あるべしと雖も、今姑らく之を詳察せず。

## 四

社會改良のためにする現努力の諸特色中、最も有望又重要視すべきは、虞らくは現に社會改良に於ける道德的要素の揚言を、高め行くことに如くはなしとの論旨を掲げつゝ、英文經濟學的文獻に於けるかゝる色彩濃厚化の來歴を、叙説せる Bliss 社會改良辭書中の一文は、精細周到なりとするを得ず、又必ずしも整へりとするを得ざるが如きも、偶々個人主義及自由競争の強き主張者が、英國學者間に輩出せるの事實あるがために、一顧の値あるが如き心地す、その所説は既に以上論じ來れる所を、敷衍するに過ぎざるの嫌なしとせざるも、かく考ふるがために以下引説することゝせり。

(イ) 百年前迄社會改良の要旨は、天賦人權又は自然法たり、經濟學の要旨は自由放任たりき、然るに今や改良の要旨は協力たり、經濟學の要旨は人格にあり、かく説かば一部の人には、餘りに

\* Bliss, The New Encyclopedia of Social Reform, pp. 780, 781.



樂觀的見解に流るゝが如く思はれんも、試みに想へ、個人主義、社會主義の改良家、否無政府主義の改良論者さへも、凡て協力を求め、又個人主義の經濟學者として、社會主義を恐るゝ理由が、此主義のために人心を頽廢せしめんと信せる點にあり、社會主義の經濟學者同主義を求むる理由が、人心は個人主義の下に、頽廢しつゝありと信せる點にあるを。素より現今凶兆候もなきに非ず、即ち幾多の社會主義改良論者は、危險にも不道德的唯物主義に近づかんとし、幾多の個人主義經濟學者は、俗人の行動を支配すべしと、期待し得べき唯一のものは、物質的利己にありとする、犬儒學派ツニプアの信條に近づかんとする、又百年前に現存せし道德的要素を、輕視するの弊も疑もなく存し得べし、即ち天賦人權の學説は、佛國革命を否虞らくは又米國革命を生みたるも、その事業は間々最も道德的なる、献身及犠牲を以て遂げられたるの事實は、輕視され易し、此ことたる當世に於て往々見るが如く、枝葉の倫理解析に趨るの極、過度に流れて結局何物をも獲ず、脩身の大旨を忘るゝの弊、又は躬行の本分を顧みず、外來の目新らしき思想追隨に、日も亦足らざるの弊に照し、大に考ふべき點なるが、そは兎も角 Smith により示されたる、經濟學理研究の精神につきても、同じ見地より見るべきものあり、即ち氏の經濟學につゝ *Toynbee* は評して曰く、二觀念は諸國民の富の各論旨毎に織込まる、個人自由の最上價值につきての信念はその一なり、人の自愛は神の攝理たり、各個人は自己の利益を追隨することにより、萬人の福祉を増進し

つゝありとの、確信はその二なり」と。（本誌十八卷一號七三頁參照）

（ロ）吾人自身の間に於ける缺陷を忘れず、過去の道德的元素を輕視せざるも、尙認むるの要あるは、經濟學が前世紀中特に英蘭に於て、著しく道德化され、現今諸方面に於ける社會改良のために、弘く行渡れる努力は、それ自體として道德的衝動の深刻及擴大を、意味表徴することなり、Bagehot 言へるが如く、舊經濟學特に Smith の後繼者にありては、Smith 自身に於けるよりも、人々を目するに單純なる經濟人、金儲けの動物視したり、然るに現時の經濟學特に心理學派の經濟學は、人を考察するにそのありの儘の人性に於てす、歴史派の經濟學も然りと雖も、その程度は劣れり、又舊經濟學の目的は、主として物質的生産の觀點より、諸國民の富を考察したり、現今經濟學は尠くとも分配問題及勞働者の幸福に、著しく増大せる注意を拂ふ、純科學、經濟純理たること遙かに少く、實地の方策たること遙かに多きに至れり、此變化は主として Mill の功に歸すべく、少くとも先づその著書に於て顯著となれり、その經濟學初版序言（一八四八年）中には左の一節あり、

本著の目論味は、Adam Smith の著書以來、英蘭に於て公けにされたる、何れの經濟學論著の仕組とも異れり、

本書が徹頭徹尾諸原理とその應用とを組合はせんとするは、その眼目の特色たり、單に經

經濟學の諸普通原理を説けるものとしては、本著に匹敵し、否本著に勝るものあるべきも、是等の著書と本書とを分つべき、主眼も亦茲にあり、此一點それ自體として既に本著に含まるる諸觀念及諸題目が、一科の抽象的思索として考へられたる、經濟學中に含まるゝものに比し、遙かに多きを含意す、實際の目的よりせんか、經濟學は他の數多き諸科の社會哲學と不可分的に織綜せらる、惟ふに枝葉の細目に亘ること以外に於ては、實際問題にして經濟學上の諸假説のみに訴へて、解決し得べきもの虞らくは一つもなし、純經濟問題たる性質に、最も近きものにつきて見るも尙然り、實に Adam Smith は造次にも此眞理を忘れず、又その經濟學の應用上、純經濟學により授けらるべき、考量以外の考量に絶えず訴へ、又屢々一層博大なる考量に訴へたり、故にその讀者をして Smith は、實地應用のため、經濟學の諸原理に精通せりと、至當の根據により感銘せしむ、之がために又世に經濟學の著書は多き中に、Wealth of Nations のみは普通讀者の間にも、愛讀されしのみならず、その説をして時人及立法者の腦裡に、強く印せしめたり。

本著者の見る所によるに、その職分よりするも普通觀念よりするも、Adam Smith の立場を踏襲し、唯現代に於ける一層博き知識と、進歩せる諸觀念とに適應せんことに努めたる一著書は、現今經濟學上必要視すべき、一種の貢獻とすべし。

は、Mill 以來經濟學は、歩一步道徳的に延び行きたり、かくて Ely 教授は經濟學を三紀に分てり(前掲書九五及九六頁參照)即ちその初め經濟貨物は眼目とせられ、之が生産は人の意志と無關係たるべき、獨立の一過程たるかの如く取扱はれたり、極端なる一著者の如きは、富の生産を支配すべき諸法則が、人存せざるも亦恰もその法則として、存するが如きものたるべしと迄極言せり、次いで諸經濟貨物につき人との關係を究むとし、貨物の生産消費に伴ふべき諸社會關係は、一層細かに研究せられ、最後に最初に起れるが如き考へ方と全く反對に、經濟學の起點及終點は人にあり (Rocher の立言) と明言するに至れり、Fawcett 夫人の經濟學小著に窺はるべき經濟學の定義は、第一種の見解をよく表明せるものと見るを得べし、そは下の如く説けり、即ち經濟學は富の性質と、その生産、交換及分配を律すべき諸法則とを、研究すべき學問なりと、次に J. S. Mill の著書に窺はるゝ經濟學の定義は、第二種見解の、可なり明確なる一表明なり、曰く經濟學の諸著者は、富の性質並にその生産及分配の諸法則として、その中には普ねく人間願望の物體たるべき、この富に關する人の狀況、又は一人間社會の狀況が、賑かにせられ又はその逆まとなさるべき、あらゆる原因の作用を直接間接に、包含せるものを教へ又は研究せんとすと、かゝる定義によらんか、諸社會關係は經濟學の正面に立てらるゝことなしとするも、さ乍らその后門より呼込まるゝことゝなるべし、第三紀の例證として Ely の擧ぐる所は、ミシガン大學教授 Henry C.

Adams がその經濟學講義錄 *Outlines of Lectures upon Political Economy* 第二版(一八八八年)中經濟學につき説けるものにあり、即ち曰く經濟學は産業社會を取扱ふ、その解析的一科學としての目的は、人々の産業的行動を説明するにあり、その建設的一科學としての目的は、産業社會の組成及經理のために、科學的合理的基礎たるべきものを、啓明するにありと。

(二)、されど現代が經濟學界に於ける、何れの進歩に負ふよりも、負ふ所一層多きは、Carlyle, Ruskin, Maurice, Mazzini, Tolstoy. の如き、道德的大改良論者なり、富とは善く暮すことなり、人生は肉以上なり、人は財産を有すべくして、財産は人を領すべきに非ずとの觀念につきては、如何なる輓近改良論者よりも、Ruskin に負ふ所あり、吾人には人としての可能性を高め、社會上經濟上の諸虚偽を抑へて、眞人格を顯彰するの責ありと考ふるに至りしは、Carlyle に負ふ所なり、現時の教會が基督教派社會主義に盡すは、主として Maurice に負ふ所なり、義務は權利よりも偉大なり、神は唯物主義以上たるを、何人よりも強く高論せるは Mazzini なり、個人主義者に犠牲の偉大を教ゆること、何れの人よりも多かりしは Tolstoy なり、教會以外よりせる改良論道德化に、最も深く貢獻せるものとしては、上記の如き人々によるもの、外、尙實證學派及輓近倫理運動によるものあり。

(ホ) Frederick Harrison は一八九一年一月 Address on Moral and Religious Socialism 中に言く

り、實證主義の社會的中心格言は、諸政治的利害をして諸道德的義務に讓歩せしむるにあり、その目的とする所は、人道の宗教、人の奉仕にあり、而して米歐に於ける倫理的化育を、目的とする諸協會として、その目的として誓へる所は、その會員の道德生活と、社會の道德生活を高尚ならしむるにあり、その協會は何處にても、社會改良の道德的方面につき、注意を喚起しつゝあり。

(へ)、吾人の題目とする所、社會改良の道德的要素に存するは、記憶さるべき點なるに、一部の人は社會が道德的に、進みつゝあるやを疑ふ(犯罪増加を想へ)即ち假令は J. M. Whiton, The Reaction of Ethics upon Economics, address at Yale College, June, 1888 は言く、[Smith 及その諸門弟は、Lucretius により説かれし如き原子の渦卷により、一の經濟的整頓組織を生むべしと想像せるが、その渦卷の自然的結果として、吾人は現今產業界に於て、道德的混沌に脅かさる、劍橋 H. Sidgwick 教授の如き、公平なる一觀想者も、引續ける争闘及競争のために、生み出されし反社會的氣分及心的態度を評論し、産業の個人主義的全組織は、之に伴ふ物質的長所ありとして、根本的に風俗を壞亂せしむとの、非難を入るゝの餘地なきやを問へり、その問は Belfast の Graham 教授により答へられたり、屢々可なり堂々たりとすべき諸學校の倫理と、異れる倫理として我實際界に行はるゝものは、最も低き私慾主義及最も野鄙なる道德的唯物主義に局限せらるゝ。

米國の政治的豫言者も、亦霧を通して波濤の寄せるを聞き、その見張場より「前途危險」なりと叫びつつあり、Sumner 教授は言へり、世界中何處を搜すも、金權政治の危險に就き、米國に於ける程恐るべきはなし、……現にその問題は、民主主義に對する死活の問題として現存す、……吾人の前途に横はる事業は、社會體の眞根帯より、道德力及政治的道德の、生氣潑瀾たる豫備を、要すべきものなりと。

(ト、されど是等弊害の承認と、是等弊害を匡正せんとする努力とは、一進歩を示す、富者にして社會改良を嘲笑する者も、餘儀なく「富の福音」を躬行するが如き、従前になかりし所なり、又時代の最良兆候の一つとして、慈善が喧しく評論せられ、その始め貧者より奪へるものを、貧者のみに與ふべしとし、貪慾否虞らくは詐欺により積立てたるものを、諸大學及慈善團體に寄附すべしとする點に於て、今日程盛んなること決してなかりき。

衆生の愛を以て、現時の如き反目に代らしむべき、協力主義の一社會を理想とし、又その社會にありては、その創基者としての職分上、自己をも社會をも共に濟度すべき、人の暢達に何等の制限あるを、得ざるべしとせる米人 Henry Demarest Lloyd (一八四七—一九〇三年) 主張せる如く、吾人は今や「一新良心」を展ばしつゝあり、又久しき以前に Mazzini は草したり、「各政治問題は一の社會問題となりつゝあり、又各社會問題は急劇に一宗教問題となりつゝあり」と、又 Matthew

Arnold は文明を定義して、「全社會體を人道化し、調和を得て眞に人情ある生活に、之を化育することなり」としたり、こは現在の文明につき眞ならずとするも、尠くとも現在に於ける社會改良の、目的及努力なり。(未完)